新型コロナウイルスの感染拡大による

いいえ

40.4

無回答 ある

93.4

1.3

(N=1,009)

100%

(N=1,009)

府中市のスポーツ推進の現状

市のこれまでの取組

■第6次府中市総合計画

- ・基本目標3「人とコミュニティをはぐくむ文化のまち(文化・学習)」(6)スポーツ活動の普及・促進の中で、「スポーツ活動の支援」「スポーツ環境の整備」の二つの施策を掲げ、「スポーツの生活化」や「全ての市民が積極的にスポーツ活動に取り組める拠点としての施設整備」といった取組を推進してきました。
- ・行財政運営の恒常的な見直しを行うための「事務事業評価」において事業と施策を評価する指標の実績値の推移は右図のとおり。

■第51回市政世論調査(令和元年9月)

・1週間に1回以上スポーツをする市民の割合は**57.2%**

指標名	基準値		実績の推移				H29年度	H29年度
			H26 年度	H27 年度	H28 年度	H29 年度	目標値	達成率
週1回以上スポーツをする 市民の割合	44.7	%		42.9	- 1	49.3	50	98.6%
クラブや同好会に入って活動する市民の割合	33.2	%		27.1	- 1	·	40	0.0%
市主催スポーツ事業への 参加者数	248,882	人	244,609	248,751	248,267	215,297	291,307	73.9%
大学やトップチームと連携する事業数	2	件	2	2	3	3	3	100.0%
指定管理者制度の導入	0	施設	0	0	0	0	1	0.0%

- とても健康だ

市民の意識【スポーツに関するアンケート調査を参照】

■ご自身について

- ○**心身共に健康**だと思っている(「とても健康だ」「まあ健康な方だ」を足した割合)人は**86.6%**
- ○新型コロナウイルスの感染拡大によりスポーツに対する**意識や行動に変化した人**は **40.4%**

■「する」スポーツについて

- ○成人の週1回以上のスポーツ実施率は令和2年3月31日までの**59.8%**、4月1日以降で**60.8%**(令和元年9月時点は57.2%)
- ○スポーツや運動をした理由は、「**運動不足解消のため**」が最も多く 69.2%、次いで「健康、体力づくり」が 65.6%、「楽しみや、気晴らしとして」が 45.7%
- ○令和2年4月1日以降、スポーツを行った際に、インターネット上の動画 (YouTube など) を参考にした人は29.4%
- ○スポーツや運動をすることの**妨げ**になっているものは「**時間的な事情**」が最も多く **52.2%**
- ○「現在、スポーツを行っていない。また、これから先も、するつもりはない。」人は **24.7%**

■「みる」スポーツについて

- ○令和2年3月31日までの1年間で週に1回以上**スポーツ観戦** (TVでの観戦、練習観戦も含む)をした人は**27.8%**
- ○この1年間府中市を拠点に活動する**トップチーム**のスポーツ**観戦をしていない人は64.2%**
- ○今後、スポーツを**観戦するために必要なこと**は「無料招待日や地域住民割引等の特典の充実」が最も多く 61.8%

■「ささえる」スポーツについて

- ○スポーツに関する指導や協力、スポーツ大会の運営などスポーツに関するボランティア活動を行ったことがない人が 93.4%
- ○ボランティア活動を行ったり続けたりするきっかけや動機づけについて「好きなスポーツの普及・支援」が最も多く30.7%

■スポーツに関する情報について

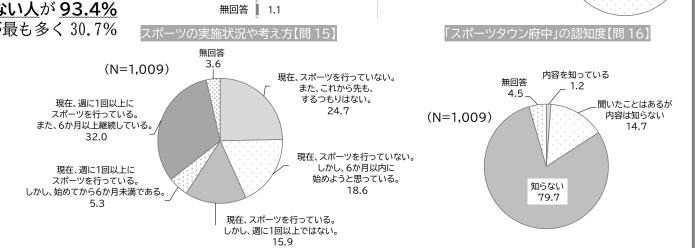
- ○「スポーツタウン府中」を知らない市民は 79.7%
- ○府中市のスポーツ情報の入手先で最も多いのは「広報ふちゅう」で 37.3%
- ○府中市のスポーツ情報で**知りたいこと**は「**健康や体力づくりに関する情報**」が最も多く **37.1%**

■障害者のスポーツ振興について

○障害者スポーツに「関わったことはない」人が 91.1%

■市に今後力をいれてほしい施策

○府中市は今後力を入れるべきだと思うことは、「**身近なスポーツ参加の機会を増やす**」が最も多く **29.4%**、 次いで「子どもたちの体力向上」が 21.4%



(N=1,009)

あまり健康でない 9.8

0%

美容や肥満解消のため 32.0

その他 5.9

(N=845)

家族や友人とのふれあいとして 20.4

健康、体力づくり

運動不足解消のため

楽しみや、気晴らしとして

自己の記録や能力を向上させるため 6.9

健康ではない「

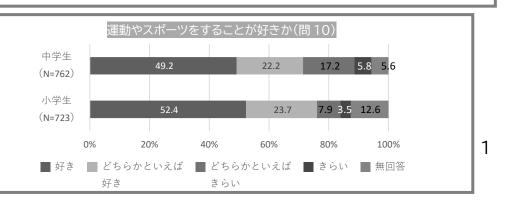
まあ健康な方だ 66.1

スポーツや運動をした理由【問7-3】

50%

子どもの意識 【スポーツに関するアンケート調査を参照】

- ○外で遊ぶことが好きな割合と、運動やスポーツをすることが好きな割合は**年代があがるにつれて低下**している
- ○スポーツを行う**頻度は年代があがるにつれて増加**している
- ○「現在、スポーツを行っていない。また、これから先も、するつもりはない。」小学生は 12.9%、中学生は 17.3%と、 **年代があがるにつれて増加**している
- ○家族と一緒に運動やスポーツを行う機会を増やしたい**小学生は 64.6%、中学生は 45.4%**
- ○ボランティア等の経験は年代があがるにつれて増加している



国、東京都の動向

第2期スポーツ基本計画(国)

■ポイント

- 1. スポーツの価値を具現化し発信。スポーツの枠を 超えて異分野と積極的に連携・協働。
- 2. 数値を含む成果指標を第1期計画に比べ大幅に増 ħ□ (8⇒20)_a
- 3. 障害者スポーツの振興やスポーツの成長産業化な ど、スポーツ庁創設後の重点施策を盛り込む。

■ 4つの指針

- 1. 「人生」が変わる!:スポーツで人生を健康で生 き生きとしたものにできる。
- 2. 「社会」を変える!: 共生社会、健康長寿社会の 実現、経済・地域の活性化に貢献できる。
- 3.「世界」とつながる!:多様性を尊重する世界持 続可能で逆境に強い世界クリーンでフェアな世界 に貢献できる。
- 4. 「未来」を創る!:2020年東京オリンピック・ パラリンピック競技大会等を好機として. スポーツ で人々がつながる国民運動を展開し、レガシーとし て「一億総スポーツ社会」を実現する。

比べ大幅に増加(8⇒20)



ドーピング防止

ハイパフォーマンスセンター等の充実

スポーツ基本計画とは?

スポーツ基本法 (2011年制定)

スポーツを通じて 幸福で豊かな生活を営む ことは、全ての人々の権利

スポーツ立国の実現 が最大の使命

スポーツ基本計画

スポーツ立国の実現を目指す 指針と具体的施策

東京都スポーツ推進総合計画

■ 3つの政策目標

- 1. スポーツを通じた健康長寿の達成
- 2. スポーツを通じた共生社会の実現
- 3. スポーツを通じた地域・経済の活性化

■ 3つの視点と 30 の政策指針

3つの政策目標の実現に向けては、「する・みる・ 支える」の3つの視点から課題を整理し、30の政策 指針により具体的な取組を明らかにしています。

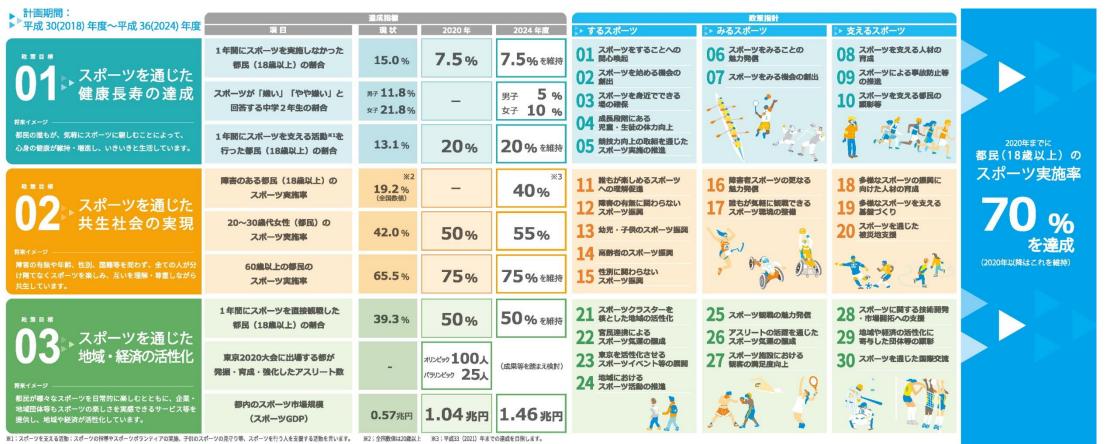
■ 9 つの達成目標

それぞれの政策目標において進捗状況を的確に把 握するために合計9つの達成指標を掲げます。

■基本理念

「スポーツのカで東京の未来を創る」

都民のスポーツ実施率 70%を達成し、誰もが、い つでも、どこでも、いつまでもスポーツを楽しみ、ス ポーツの力で人と都市が活性化する「スポーツ都市東 京」を実現します。



の重点施策を盛り込む。

文部科学省 障害者活躍推進プラン (平成31年4月) (抜粋) 障害のある人のスポーツ活動を支援する ~ 障害者のスポーツ活動推進プラン~

趣旨

- ◆「共生社会」の実現に向けた取組を加速し、より積極的に障害者の活躍の場の拡大を図るため、平成31年1月に浮島文部科学副大臣のもとに省内の関係課で構成される「障害者活躍推進チーム」を設置。
- ◆学校教育、生涯学習、スポーツ、文化芸術の各分野において、より重点的に進めるべき6つの 政策プランを打ち出し、障害者が個性や能力を生かして我が国の未来を切り開くための施策を 横断的・総合的に推進。

現状

- 「第2期スポーツ基本計画」(平成 29 年3月 24 日文部科学大臣決定)では、2021 年度まで に障害者(成人)の週1回以上のスポーツ実施率を 40%程度(若年層(7~19 歳)は 50% 程度)とすることを目標に掲げている。
- 平成 29 年度の障害者 (成人) の週1回以上のスポーツ実施率は 20.8% (7~19 歳は 29.6%) であり、平成 27 年度 (成人は 19.2%、7~19 歳は 31.5%) と比較して、成人は 微増、7~19 歳の若年層は微減となっている。
- 運動部活動・クラブがある特別支援学校は高等部でも約6割であり、また総合型地域スポーツ クラブにおいて障害者の受入があるクラブが約4割にとどまるなど、<u>障害のある人々のスポーツ</u> ツ実施環境は十分ではない。現在、各地域においてスポーツ、福祉、医療等の関係者間の連携 を進めるとともに、特別支援学校等の身近な施設を地域の障害者スポーツの拠点とする取組等 を実施しているが、さらに取組を加速させるべき状況にある。
- また、障害のある<u>児童生徒</u>は、特別支援学校に限らず小・中・高等学校にも在籍しているが、 小・中・高等学校において、その後のスポーツ生活の土台となるべき<u>体育の授業や関係行事等</u> の一部・全部に参加できず、又は他の児童生徒と同様の指導を受けられなかったという経験を もつ障害児は少なくない。
- 障害のある人がスポーツを試しにやってみようとするときや、やり方や道具に工夫を加えた指導等を受けようとするときには、そのような工夫に知見を有する指導者や、スポーツ車いす等の個人用具を含めたスポーツ用具の準備・調整などが必要となるが、それらがそろっている環境が乏しいことが、スポーツ実施の障壁の一つとなっている状況もある。
- さらに、障害のある人がスポーツを「みる」機会についても、スポーツイベントにおいて座席 指定ができないなど不利な環境に置かれる場合があると言われており、<u>障害者の観戦のしやす</u> <u>さの向上</u>を図る必要がある。

具体的対策(2019年度中を想定)

- ●小・中・高等学校に在籍する障害のある児童生徒のスポーツ実施環境の整備<大学における障害者スポーツの指導者育成のカリキュラム導入の推進等>
- ②障害のある人がスポーツを実施するための拠点の整備⟨スポーツを試すために必要な要素をそろえた普及拠点の見える化⟩
- ③スポーツイベントにおける障害者の観戦のしやすさの向上 <会場づくりや運営方法について好事例を収集>

スポーツ庁 スポーツ実施率向上のための行動計画(平成30年9月) ~ 「スポーツ・イン・ライフ」を目指して~ (抜粋)

スポーツ実施率向上のための行動計画を推進する意義

スポーツの「<u>楽しさ</u>」や「<u>喜び</u>」こそがスポーツの価値の中核であり、さらに、継続してスポーツを「する」ことで、<u>勇気、自尊心、友情などの価値</u>を実感するとともに、自らも成長し、<u>心身の健康増進や生きがい</u>に満ちた生き方を実現していくことができる。例えば、日常的にスポーツを実施している人ほど、生活満足度が高い、ストレス解消効果を感じているとの調査結果もある。

また、スポーツをすることによる健康増進効果もある。広く認知されているように、糖尿病・高血圧・ 脂質異常症等には、生活習慣が大きく関係しており、食生活の見直し、禁煙、適度な睡眠の確保等と並ん く健康長寿社会の実現に向けた て、スポーツの実施も予防の重要な要素となってくる。 スポーツの貢献イメージ>

現在 (2016 年 (平成 28 年) 時点)、我が国の健康寿命は、男性が 72.14 歳、女性が 74.79 歳であり、平均寿命との差は男性が 8.84 年、女性が 12.35 年となっている。一人一人が病気や怪我を防ぐという予防の意識を高め、QOL (Quality Of Life) の維持・向上を図っていく必要がある。

本行動計画の推進により、国民一人一人がスポーツをすることを 特別なことととらえずに、<u>日常生活の中で自然にスポーツに親しむ</u> 「スポーツ・イン・ライフ」を実践することによって、スポーツの 価値を享受するとともに、自らの健康増進、ひいては、健康寿命の 延伸を図り、健康長寿社会を実現していくことが求められている。

また、年代、性別、障害の有無等にかかわらず、全ての人々がスポーツを通じて、地域社会との絆を深めることは、健康長寿社会の 実現と共に共生社会の実現に寄与するものである。



スポーツ実施率向上のための具体的取組

スポーツ実施率の向上のためには、現在、<u>スポーツを実施していない者</u>を中心に、どのように働きかけを行っていくかという検討が中心となる。実際には、一人一人のスポーツに対する意識や態度、境遇等が多種多様であることから、個別に対応することは現実的でなく、一定の限界を念頭に置きつつも、年代、性別等による対象毎に、その対応を考えていく必要がある。

そこで、まず、「全体」を対象とした取組を俯瞰しつつ、生涯にわたる豊かなスポーツライフの基礎づくりが求められるが、スポーツの実施について二極化が課題である「子供・若者」、特にスポーツ実施率の低い「ビジネスパーソン」、相対的にはスポーツ実施率が高いが、健康・体力の保持等が必要であり、スポーツにより生活習慣病の改善や介護予防等が期待される「高齢者」について、それぞれの年代を対象とした取組をまとめた。加えて、男性と比較してスポーツ実施率の低い「女性」、スポーツ実施率が低く、未実施者の8割超が無関心層である「障害者」を対象とした取組も併せてまとめることとした。

また、上述したスポーツを実施していない者について、その根底には<u>無関心層の存在</u>があることに留意する必要がある。そのため、まずは、スポーツをする気にさせる施策を実施し、その情報を的確に発信して無関心層に届けることが重要である。

次に、スポーツの意義は理解し、自分でもスポーツをしたいと思っているものの、実行に移せていない層が存在する。例えば、三つの間(「時間」「空間」「仲間」)がないといった課題がある。そのため、スポーツをするきっかけづくり、環境面からのサポートが必要となる。

最後に、スポーツを始めた後、<u>ドロップアウトしてしまった層</u>が存在する。飽きてしまった、 面倒になったといった理由で<u>継続しないという課題</u>がある。そのため、スポーツを<u>習慣</u>にするた めの後押しが必要となる。このため、これらの段階別の視点を考慮する必要がある。